仕官格義辨　上

西荘文庫

和書門
類
三五六六四
號
一二九
函
八
架
二
冊

内閣文庫
和
書
類
三五六六四
號
二
冊
一五二
函
一〇
架

和書
三五六六四號

内閣文庫

番號	和	35664
冊數		2 (1)
函號	152	101

館
共二
152-101

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

仕官格義弁　巻一

巻一目録

一　寺社奉行之事
一　町奉行之事
一　御勘定奉行之事
一　三番頭并小十人頭之事
一　新番頭并持弓筒頭之事
一　徒目付組頭之事
一　徒士番頭之事

日本政府図書

一 當番虎也之事
一 寄合小普請之事
一 當番虎嫡子御目見之事
一 當番入定法之事
一 惣領御番入之事

巻二目録

一 無足安居之事
一 大酒役之事
一 御徒組頭中之事
一 新参御役替之事
一 武役布衣之事
一 諸番より出役之事
一 寄合より役之事
一 御番柄より役之事
一 二条大坂駿府在番之事
一 大坂目付之事
一 甲府勤番之事
一 御本丸より西丸役之事
一 七十歳以上御褒美之事

一 大的騎射 上覧之事

一 御成先ら簾之事

諸役御免巻之上

寺社奉行之事

同て日ち社奉行之御役儀ハ 大方御巻ニ出

兼帯にて勤らるゝ 右衛役ハ大名ハ同時代より出

来ましろそれ御座候 著日御巻ニ出

之節の古来の事これは 慶長年中よ里後締

江戸ニ上り当時御役儀有之事に御座候 寺

社奉行之儀 寛永十弐年亥十一月十日

堀市正安藤 右京亮 松平出雲守 右三人始

御目付之儀ハ御奏者番兼帯ニ被仰付候儀ハ而
之間詰ニ被仰付 付札 御目付御役兼帯
被仰付候而も御目付にても城主ニ被仰付御役ハ
輩ニも城主ニ而奏者番ハ被仰付間敷き
御役人ニ而為兼帯ニ被仰付候事 又
同氏伊豆守正年町奉行より大目付兼帯
より山名因幡守 付札 御目付ニ而有之候人 古来奏
者番兼帯ニ被仰候中 先規も大番頭相勤
付札 御目付兼帯被仰付候 而も(?)
ニて可有之候 着て御上下の儀とひとし

難見候へ共も是迄之儀と相考候哉 大目
付ハ評定所へ御加増被仰付 其元六ケ敷儀にも有之
も支配にも有之候 然ル所 御目付一両人
宛相勤候中 其上大目付にも無之候得共
奏者番兼帯被仰付候 又同氏
因幡守 大目付番頭より相勤候由 付札 御目付ハ
元禄十四年 十二月十日 大目付番頭より本多
駿河守殿被仰付 御目付之儀御勤候 正年
宝永九年 辰十二月十六日 本多伊豫守 大目番
被仰付候以後 寺社奉行被仰付 御目付之儀も

有之候ニも町奉行より寺社奉行被
仰付候も有之候、然共　前日町奉行
より寺社奉行へ　仰付候も寛永十
八年安藤右京亮　堀式部少輔　江戸町奉行より
寺社奉行へ　仰付候　大目付へ　仰付候
例も有之本多弾正少弼本多伊豫守度々初而當
役ニ　仰付候　堀市正　松平出雲守　松平大
番頭より　仰付候　甚江守も牧野も　仰付候
寺社奉行文同て　仰付候　一万石高
社織下之つも大名役之

之内大名役之河内殿なとにて候　前日御座
若年寄元者不及申京都所司代大坂御城代
御奏者番大坂御定番寺社奉行之上ニ御側衆
御留守居大御番頭大名衆も勤ル事も
然共御側衆大御番頭大名衆之御役ニ而伏
見奉行も此年石川土佐守井伊掃部頭
之勤之三役以大名役ニ而も然共
大御番頭之嫡子　御旗本也　御目付
以文同之官位之儀者無之候
御旗本者城主也

△此町奉行創始沿革等ハ記シ无シ若脱セシナラン

大岡元ハ宮(?)仕候而元相見以へ候首尾ニ而宝
ニ大岡も有之候
ニ而之候ニ大岡元寛永ノ始ゟ之変
ニ而正月ニ而御礼申上候　御城ニ而宝
承応年より万石以上ニ而御留守居ニ　御目見
被仰付元之首尾ゟ
寛永九申年より御先手役被仰付
渡辺人ニ而御勤来候事　御目見
年ノ宝八十人丹後守相勤候新規ニ
御目見之人ゟ其以後享保ニ

年貢三月之評定所ニ御役所ニ而
免許之事ニ而
　御勘定奉行　国初之御役ニ而
国初御勘定奉行ハ大猷院より
御勘定之事ニ而元も首尾ニ而曽根ニ及候
伊丹ニ而之事
ニ事ニ寛永年中御役ニ　善御勘定奉行
伊丹播磨守康年元より御勘定奉行
改酒井紀伊守杉浦内蔵允ニ而元御役ニ

相勤候よしにて其以後 寺社奉行より 松浦任但
徳山五兵衛 林奈官して 当御役に勤 伊丹播
磨守 松浦信 内蔵助 甲斐庄 飛騨守 丞
部 駿河守 大岡 備前守 山田には 諸太夫之号
に抱へ 諸太夫役と云 御目見 天和弐年 戌
十二月廿六日ニ及ひ 勘定所 不残 御組頭 奉行衆
普請奉行 相勤 宝永六年 卯十二月より 相当
に諸太夫役ニ成り 以申渡りに 又同じ内
御勘定吟味役を 以ての御より 始り 此役
して是也
普請 吟味役に 儀 天和二年 戌

十二月 御勘定組頭より 佐野六右衛門 後御勘定奉行ニ成
等壱人 始ニ 御目見 九布衣役にて其時に
其以後 貞享四年 卯 九月十日 同組頭より
御勘定吟味 荻原彦次郎 後御勘定奉行近江守
布衣人に 御目見にて 御勘定組頭 布衣
宮様より出役 にて 除くに 御目見 享保
勤 正徳二年 辰 三月廿八日 御納戸頭より 初尾
麻生二人 後御勘定奉行 彌様守 席を 御納戸頭より 上
二百俵 は役にて 御目見 元文二年 巳
十月朔日 布衣 席二 御勘定奉行 御目見

御役ハ御勘定組頭より八木渡候所大御番方より
吟味役ニ　被仰付

三番頭并平士人数之事

同し目之番頭ハ古き　御役より及旨有
頭より始り候　書院ハ　二番頭ハ
儀ハ何も御書院之御役ニ而内ニおゐて大御番頭ハ
古きより取立三河ニて相備り御取ニて候
江府十所　後浅野安芸守　松平安芸守所
濱名之大番所　後大隅守　後石見守　右二組ハ　仰付らし

天正十八庚寅年ニ　仰付ハ組ニて松平周防
後大隅守　水野若狭十所　後対馬守　水野隠岐守　後市
正二つの組後若狭守長十弐未年　松平出雲守　松平
後石見守　水野備後守　右三組ハ駿府旅
御城ニ　仰付ハ元和弐辰年　松平丹後守
組ニ　仰付ハき　山　大御番十組ハ三而定ニ候
寛永三寅年　濱名之大城守　組ニも駿河
大納言殿ニ被為付一組城ニ付　右山城守
組ハ代々として　小笠原候守　組ニも新
規ニ被　仰付ハ　其後寛文九年

甲辰八月晦日山城守内藤石見守新規ニ小
二組ニ　御目大御番頭合十弐組ニ　相定
めらる　同十一戌年　松平丹後守組頭松平
豊前守番頭ニ而組中江申渡し科有
之改易被　仰付候　豊前守ハ久世大和守後ニ追放
居られ　御目付衆被仰付て高木主水正組ニては
新規ニ付　御目付其所ニより今迄大御番
所ニ十弐組ニ而有之候処ニ弐組ニ而　寛永
之頃ニ大御番ニなしき番町ニ而有之下表
表ニ十弐組相役ニ而有之候　表二番町ニ無之

相渡候大番町ニも御下屋敷ニ而被下候傳通院
前ニ而成程番町ニ備置れし大番ニ
屋敷ニ而被下候相渡し番町ニ而被下御書
院番頭ニ而被成置候長元和ニ而大坂ニ御供ニ
成り之下野守伴八正内藤紀伊守青山伯耆
守松平成井守相勤今ニ而其後寛
永九年申候而同諸大番ニ而其後候忍て
相勤候得共一番本多美濃守組ニ而水野
石見守弐番太田備中守組ニ而川久保出雲
三番大久保右京亮組ニ而水野出雲守

四番酒井宮内少輔組頭長谷川久三郎 五番大
久保主膳正組也しか 榊原小兵衛組 六番田中
主殿頭組頭山口半左衛門 七番松平伊賀守組
頭宮田四十九郎 八番永井日向守組頭伊沢吉
左衛門右八組ハ 御目見 同十年丙八月廿六日ニ二
組御目見之上 杉本忠兵衛 御預組也 大久
保源太左衛門 堀田若狭守組頭本多九郎右衛門
書院番十組ニ相定ル也 其後慶安三年
寅九月三日 右三組ハ御用ニ組頭ニ 為御
小性組番ハしかし 小栗右京亮組 松平織

新大久保 後 右京亮組頭 黒田新兵衛 右御書院
番組ハ 御目見 御書院番弐組年中 御
十組ニ相成候也 慶安四年卯九月廿日 番頭
水野下総守 病死ニ付御役ニ 御目見
候組年中御組之割也ニ付而 組頭長野権左
衛門ハ御先手ニ被仰付 跡代滝川中務御役ニ
御目見 承応弐年巳九月十一日 大御番ニ而 牧野
佐渡守御預り被成 御目見 組年中御組割也
ニ付候 池田波門ハ 同役杉本左兵衛御役ニ
御目見 御書院番十組ニ相成 享保十年

巳ノ六月朔日二丸ニ而小性組出来 酒井忠?守
後出雲守ト改 組頭石川牧野伊勢守
後摂津守ト改 組頭森山修理亮 本郷組 御書
院番頭組頭 御目組中も 御書院出来
御目付也 但元和八組 四ヶ丸に組 都合十弐組ニ相定
小性組番頭ト義セリ 御書院番頭
兼帯ト被仰付候も有之 其以後元和九年
亥十一月十日 松平伊豆守 阿部豊後守 堀田
加賀守 右三人 ニ弐組ツヽ頭ニ被仰付
三人ニ而後ニ若年寄 兼帯ニ而相勤也

寛永五年辰十月ニ三浦志摩守若年寄
兼帯ニ而当職被仰付 堀田加賀守出頭ニ
弐組ハ内藤組ヲ被預候ニ付 同九年
申ノ十月八日 諸番一同ニ番頭相極ル 二組宛
松平伊豆守組頭ニ 池田帯刀 二番 阿部豊
後守組頭ニ 朽木民部少輔 三番 三浦志摩守組頭
稲垣摂津守 四番 堀田加賀守組頭ニ 三枝
伊予守 五番 内藤出羽守組頭ニ 服部左兵
衛 阿部対馬守組頭ニ 服部 青木甚兵衛
但是以後年々組頭ヲ 御小性組都合

六組ニ定ル、同年十一月十六日、武組ニ属
付番頭中根大隅守組頭戸田淡路守番頭
岡田飛騨守組頭中山勘解由是ニテ八組
帰ル、同十八年己亥六月十九日番頭長井丹波守
組頭水野上総守番頭石川摂津守組頭松
平左近右武組ニ
相分リ、其後慶安三年寅九月三日東
組ノ内二組ヲ出シ番ニ　御付新規ニ
組ル　御付番頭松平伊賀守組頭大久
保市十郎番頭本多大隅守組頭奥田内蔵
助、番頭内藤出雲守組頭大久保宮内、番頭渡辺
丹後守組頭本多外記、此組ニ付テ御小姓組組
合相成組ヲ成シ、慶安四年卯八月十九日
番頭内藤信濃守、其年二月組中ヲ組ニ分割也
帰組頭渡辺丹下右衛門ハ同役林元年人ヲ
弘　御附ニ被成候、其年二月十八日番
頭内藤出雲守ニ側元弘　御附組中ハ
割也、此時組頭大久保主膳同役日役ニ之
助ト成、御附此時再組頭ヲ定ル、享
保十年乙巳六月　御小姓組ヲ二組御筆院

番衆　　　　御徒八組より相勤候　元文弐年
巳年十一月十八日　中根大隅守組頭大橋文左衛門
養子被　松平伊勢守組頭ゟ神保伝左衛門
右弐組新規ニ付ら　御目付御本丸六組西丸
小組御小性組十組より相定候　享保二年
巳五月朔日
大御所様御附西丸御小性組新規ニ付
御目付御本丸同役六組より組替ニ付　仰
右之儀番頭組頭同人組より松平　菱谷所　新御
番頭より組衆之儀　丹波守殿　組頭御本丸同役

新番頭へ組替ニ而菱谷八郎左衛門組御小性
組御本丸六組西丸六組合十弐組ニ相成候　又同
丁日三番頭之儀ニ無之候而ハ小十人組
御用之頭が嫁ニ出ル　之儀ニ承度候　番頭小十人
頭ニ談之儀以　御小性組番頭より兼帯ニ而
被仰付　元和九年　亥六月より相定　小十人組　仰
付　中根伝七郎　福田庄七郎　新番二所之被
被仰付　寛永九年　申八月十八日
中西大隅守　落合源左衛門　長坂血鑓九郎　藏
右小十人ら　御目付組合八組より　桐生相勤候　元文弐年

三年寅九月二日新規ニ而一組被仰付　御目付荒
荒川長右衛門・四田吉左衛門　宮田伊織　杉浦市右衛門
天野市郎左衛門支配ニ而小十人組都合十三組ニ成
然ル処延宝四年辰四月天野三郎左衛門新
番頭ニ被　仰付組十三組之内壱組割ニ而被仰付候
同年六月御目付組井佐左衛門請取候御目付
組之人割ニ而被仰付明暦三年酉十月廿二日ニ宛
其三組荒井ニ被仰付候　御目付長谷組中割ニ
被仰付候　其三組被減候　森長右衛門小十人組十組
ニ相定候　享保十一年午二月廿八日蜂屋新左衛門之由

新規ニ而一組ニ成　御目付御本丸十組西丸五組
都合小十人組十五組ニ相定リ組中人数先
規之通　御本丸方ハ一組ニ付拾人ツヽ西丸
方ハ享保十二年丁未御減少人ツヽ御援
被下候組ハ組ニ而之人数ニ相成候延享
弐年乙丑九月於
大御所様御附西丸小十人頭弐組新規ニ御目
御本丸ゟ従前之番組ゟ組頭ゟ而掘善
御小性組御番衆出頭之組ゟ被成小十人組
被仰付御本丸十組西丸六組ニ而合而十三組ニ

新御番所之事 并 新御番始り之事

同ていそく三番所小十人所之義さしおきハヽ
新御番所元之儀も實永之末之儀と申
將軍家綱公御在世之頃之事也よひ當
落穂集之中之書中と見ゆり新御番元之始
ニ深く之書中にも有之合之そうなり
事ニも有之ニ落穂集ニ載せす其所ハ
寛永之初之頃大猷院様御在世中之事ニ五ト外

寛永ハ御役ニ勤申候ニ御年中ニ新番組御内意人
衆ニ　右出之下廳ニ於て之御頼て被上官事之元
と云　右出新御番と云　御前也當り座ハ
布衣之御小性元組頭并之御小性元と名云
御前ニ而之名布衣之御小性と申候ハ御免
事ニ而ハ無之ハ布衣之御番之始り之儀
不成ニ付ても相成　善日布衣之御小納戸
より御小性ら　御前ニて御小納戸之勝之外
衣ニても勤役之　相役て御小性と布衣
之ニも　御前ニ而之人ゟ儀御番衆ハ新御番始り

右儀ハ寛永二十年未八月十七日御小納戸ニ
遠山十左衛門與力中根次郎左衛門御小納
戸より書院番ニ罷成候ニ森西甚左衛門大
久保三郎ハ御目見ニ而柳沢ハ御小性元服
頭ニ付ニ御目見之上織部ニ而御番組
中ニ大御番ニ付ニ御目見ハ其右之節御番
ニ而隠居ハ法御目見候有之へニ
ニて新御番元治番ニ根岸横田集
書院ハ宝永元年子六月十
三日御小性組御番左京御徒かく参我

市川左衛門二組ニ御目新御番衆組ニ相定
候享保九年辰十一月十六日書院番衆
組頭より小普請御小納戸より御組頭
番後跡役大政右組新親御目
八組ニ相成同十二年申三月十九日御組
徒より去年御番又一組新規
村九組より右ハ正徳元文二年巳十二月
十三日番新書院小性組御番衆
御番新番我組
大納言様ニ御番一組御小納戸方六組

割注ニ成新番勅合八組ゟ出ル古定ハ番
頭乃儀て貞永元年ニして大番頭多ゟ
番頭りして有之有ノ人親ゟり西尾年
中まても松平方し養子根より新番要
也　御月ニ儀数多有之して　松平方し并
物頭中ゟ　同出新ゟ要ゟり但番出来
りし義て成しゟ後　松平方も手り格
こより要阿番ゟ　御月ゟ元も有ゟ後
惣集し新くゟ要し義て有し外ゟ儀
の義事也

讃州要組段之事

同て日併ゟ要し組段し内多て要組番し
組段元ナし要段ても大邊ても有し格し根し
も取りハ組年しても要段ゟり号数ノ事
ハ昔より呉名し如く浩様りしても有しき
兼て日成様要組番し組段元ゟりて昔ゟ
組様ゟり格りして有しけり　玉郷　大和守段
守　純後　松平ノ云後守　大久保加賀守ゟ　後玄蕃段
内藤新宮守　門　小性組大番段しゟ　内藤市正
後石見守　松平志摩守　後出羽守　松平内膳正　松

千石之　後藤庄三郎　当居備後守　三浦伍千所
林肥後守組より　支配ゟ　仰付大縁
年中より　書院番組より　永井讃岐守　組頭
御目見後御役被　御小性組番頭より　仰付　御留
元太田支配より元子長に　寄合より組頭
ら　仰付候　数多有之　寛より
捌差入　継目之節被仰付候趣
其外御小十人頭寄合　被仰付
差扣之上其後より　仰付　相勤
組から　仰付之　享保十六年　御役之節

表者共　其組から　仰付候　有之
新番支配組より元也　他組之者
仕ら入の　先者享保十二年　其
組合也　大番支配組元之　同人被
此人大番組から　仰付候　享保
此年　大坂在番之節　三月　当組松平
表之者役ら　相談　本丸人
元　仰付候右之　評議　徳寺
組頭ら　仰付組　同山十三ヶ
保後ニ所　同人御先手組　中院が組頭ら

御目付水野壱岐守殿より村上左門　安井忠兵衛
組より永井　彦兵衛　右両人　他組から御
目付山岡後その組より両人　他組から両人ツヽ
一　御目付小納戸組にも先規より御徒
目付無之御番衆から相勤候此人数ら　御目付申付
右之川様ノ代要之ありしめて小納戸ら
御目付之所享保十年正三月大八分　貸桂左門
色川縁左門両人組より　御目付　甚山後も
只源左衛門ら　御目付組より三人宛
元文三年午七月十日　初飛岩田兵衛新規

一　御目付是よりは中奥之番組にて両人宛
有りて相勤候処小御腰物方より先規より無之
候処正徳六年申三月大久保小納戸武藤
義左衛門　花井彦兵衛両人より先規小
腰物方ニて組より出候　御目付享保
ニ始り組より組土方人数之通只今迄も
組ニ有之小十人組よりも組頭より出候壱人
宛ニ而有之候処頭衆にて致候延享元年
より弐人宛にてら　御目付より壱人ツヽ
組より出候人々他組から出申候　又同

旧儀寄せられ候て大御番組より御徒に罷成候由
御目見之義も新御番へ組頭より申上候
由　御目見之儀もよく規矩か無之中に召出
され候ニ布衣を致し夏中も候へ　並て旧新御
番に組頭より申上候由御目見以上被仰付候由　御目見以
上被仰付候ハ大に分并に組頭より申上候か御徒組候由　御
目見以上被仰付候事ニ付ては寛永之
年辰十二月より大御番組頭並格に御徒目付
御徒組頭ら　御目見以上被仰付候て外並にて
元禄享保年中丑九月勤方大御番組頭か小

抜擢御召出御徒に成候　御目見以上　奥向
奥御祐筆組頭より申上家督を以御小普請
より布衣役に相成候へ両番へ転候　御目見以
並旧ニ古来格式組頭に相成候表御番頭より御目見
例に依て布衣組頭より外布衣役に任候
ものハ古来曽雖格式同様ニ候由御目見以上格式同様
之者共ニ候へハ両御番ニ成候事
ハ々ても古来ニ候て組頭ニ相成候而布衣ニ任候
御目見以上ても其子供者相当の事ニ候へハ　御目見
以上ニ成候

御番元之事

同日諸之番元ハ御番所ノ其外之勤ハ只
今之如有之候　昔日ハ小性組ノ
殊ニ昔ハ御花畑之番也以上御奥へ入候て
御番所ノ勤　御城門　御蔵之所之
候も之役以之　御書院番ニ　御白書院之方
御番ノ方ノ御番所へつめ候以下付　御書院
番也ノ大阪　大御番ニ　常之旨ニとて番勤
以下ノ　寛永年中ニ　二条大坂駿府にも在番

勤以元和三年之頃之御城ニ在番組中ニ番体
江戸之事之所ニ御組頭ニて江戸御番ニ
勤之中ニ寛永十六年　駿府　在番ニ御書
院之勤ハ無之　二条大坂斗ニ在番被成て
江戸之番ニ小組所ニ六組之勤ト定　同九年
未ハ之新御番新規ニ組ニ御月御番
所之奥之勤之所ニ　御小姓組ニ
御番之ハつ之御書院番ニ　虎之間
勤大之番ニ　江戸御番　御先ニ二條
大坂之在番ニハ勤候　江戸御番ニ番ハしらて

預りし御番頭何役も兼帯御奉行に有之て
御家人御番も致　御付之組番頭預りの事
にて　御本丸より御番所　相勤させ候
并し寛永御目見　御番に　御番ら　御付
支配の御役　被仰付大番頭に被仰付之儀
仰付候然れ御旗本之所　大番頭当番も従
御家臣有て出すして　昔慶長し当番に御家中
大御番元御番衆之内より被仰付候　御家臣に出
之者ハ増して　御先手ニ而被勤にし御旗本
御小性組ハ　享保元年申より御二丸に有

御本丸御番ら　仰付候大番頭被仰付
従番頭ハ仰付候　二丸え被勤候にて　同元
年辰十一月十五日　二丸に御座候　御旗本にて有
御本丸御小性組より　二丸御小性被仰付候也享
保十年巳十一月十九日　二丸御移徙にて大御
番ヽ二丸を御番ら
仰付候

御番頭並之事

同日より被大御番頭内被仰付元より可有

よりなしりりなく　書院番も出て番し
備ふ也しかも有し事にては持ちしては
御城にて候　正保三年より　御目見
人数も減じ今は百人にて申すと大に違ひ申す年々
寛文にいたりて数も出て大くなりて　有るは陸に
延宝にいたりては百人なり勤めしか判形
慶安より後は据えし人数も一組に十人ほど
御座ありし其後無役出して頭支配
出てより人数も一組六人ほどになりて新番方は
小姓組より書院番まで出て　無役八人一所

半分出して大御番方よりもなく無役二所にて積
無足人数六人無役つかまつりし者には新番方より
御門出てより　すべて無役出す小姓方新番
組より出て大分よりして一組より七八人出て元有
てには組も有りしに元禄十年丑十二月に小
姓組百人出て書院番百人　大御番八人程
迄出て減じたるに　御目見まで　又々出るに
相成り人数も減り減じ出て今に至る　新御番一組
二十人程　八人　大御番一組　六八人　但し　小姓
組は四十九　ならびに組合は　御小姓六拾八組

西丸一番組之番組三番組有之候　組中も只
人数も弐組ニ分ケ候一組ゟ三四人程ツヽ
有之候大御番方在番仕候而江戸勤番組
ニ付而一組ニ八人ツヽ而弐組分ケ候
処ニ勤候

寄合小普請之事

同日昔ゟ御役無之千石取以上
小身成者ハ寄合ニ有之候得共只今ハ三千石
以下ハ小普請ニ入り申候　享保十

一年辰十二月御方元御小性組相勤候
源之丞御役御免　祖父源之丞御目見
御伴仕候　寄合入り申候　高い千石ニ而又其
以後も元文四年未十二月二日元御使番
田中主膳新三郎御目見
是も弐千石ニ而寄合ニ入り申候而御伴
致候
若御小普請ニ入り候　先規
…
…
…

右松平右衛門伊丹兵庫頭酒井大学頭十人
小笠原信濃守ハ　御代官百石以上御番
有余をも子供にも被下候小笠原信濃守結構
之儀今小笠原信濃守に被仰付候
御目見三千石以上の面々ハ寄合
無役ハ入候布衣以下ハ小笠原
組へ入候へハ布衣以上ハ寄合
入候ハ御旗本之内ニ而も御小性居
寄合組ハ三千石以下ニても寄合へ入候
候ハ五ヶ所ハ小笠原新之丞組三千石

以下ニても寄合御免寄合へ入候ハ其上組
布衣小笠原信濃守組被仰付候
六月十九日右役目一ケ月ニ三度ツヽ定日之右
浪人ハ大名ニ被定候て小笠原信濃守組ニ被仰
家督之定日ハ十九日被仰出候
五ケ所之後元文五年に被仰付候三千石
寄合御免も三千石以下ニて御免之面々
之所小笠原信濃守組被仰付候
日向守殿右之酒井作事奉行小普請
当分支配之組作事奉行元大御番頭

同年七仙籍ゟ被召 其節小性組ニ被仰付候
ところも 召人 為り我か事候ニ小當清ニ入りけれは
寛永三年寅六月十二日 右小當清かあ所一組ノ
組頭と人々新規ニ 仰付 其ゟ承所中与ら
仰付ゟし 安積ゟ役料ハ二百俵ツヽ被下
席ハ仙台安房守小當清が組ニ上て定る出雲
ゟりし小當清流を 大観ゟり人々仙台安房守居流
しし承所りて 享保十九年寅六月ゟり出雲守
居流一組ゟり御組頭人ツヽ出 仰付右之手
組頭中ゟ被ゟり候ゟ乃下り 世帯役之

継續接しゟれ一組ゟ人々ニて 出来ゟ進封し定日
之ケ月三日ゟ之ゟ組頭し衆ゟ面ゟ返しけれは
ゟりし相も 小當清流にし被成もしまかゟ成
ゟ日ゟりし行儀も継相ゟれ根ゟ成ゟし支家
忠勇武士ゟ候れ 御主役方ゟ不
流根ゟ格別ゟての外ゟ勝ゟ候ゟの格式り
弟子ゟ春日城ゟ候上て 何角ゟ不ゟ以上ゟ候武
遂ゟ不以上ゟ仙書おゟ不ら 仰付ゟ三
手ゟ所以上ゟ寄合しゟ不替ゟれゟ所も猶
乱ゟ人ゟ国代ゟ不以上ゟり 大馬代相ゟ被ゟ

百石以上限馬代 右之内ニ而も継目之御礼を
之ハ先祖又ハ其身ニおいて御家譜御領ニ而
ハ雑有之候ニ付而ハ以下 孫之代とも御家譜之御恩
を存て罷在候者ニ付而ハ
御番組嫡子共御目見仕候
同日御番衆ニ而嫡子初而 御目見之内ニ而も継目
有之候ニ付而ハ 御書院番大久保ニ而番之嫡子共
出候而も其所々席而 御目見仕候 御
目見ヘ而 御小姓組ニ而小姓江戸勤中之内御番衆

之嫡子共 御目見之礼 仰付ハ御沙汰不成
候者ハ御目見ニ付而ハ 其節ハ若ハ御番衆
嫡子 御目見有之候ハ 天和三年亥
並ニ不申候組御番入之所も今度ニ而差し
組衆 御目見仕候組御番入之段 仰付ハ
有之番衆ニ而 仰渡候ハ 儀之
有之元禄年中より 相領申之 御
目見之節儀は仰付候而 儀之其上候
御目見之並ニ而御番入之礼 仰付ハ今度
御書院番大御番之嫡子共ニ而並番の

席ニ而御目見也　御番入小性組之嫡
子ハ部屋住ニ而御使ニ出候所ニて御目
見也　御目見被仰付候　又同日右御番入之
出候ニ付其所ニて子共之　御目見相済　御
替同前ニ而有之候ニ付如此候　番衆
御目見之上にて先祖より有之様ニ被仰付候
万治元年戊戌八月　後藤兵庫殿上番ニ勝レ候所江
井上河内守殿　主馬殿子形之一
尾張家系之御子　源太郎　同手神　桂右文殿
之修理大夫養子ニ而実子也　御目
見仕候者一所也　御目見致させ御番
仕候衆ハ家督相続後在之　御目見也　仰
付候者以後大御番方ニもあり　其例ありて養
子也　御目見無之相済申候

御番入之定法之事

同日柳之間ニ而書付ニ而大御番組頭
ニ相渡ス　其者御番入小十人組頭江相渡
御番入之所者大御番入之節も是也
修理柳之間ニ而申渡候ニ付其上ニ而

編ニ書抜候様ニ而兼抹候ニ付書上ル
御ニ付テ候右相考候ヘ共　享保十年巳十月
古来惣領共番入之節、小十人組ニ被召出
三人小十人組ニ候　但、其節新御番
大御番ニ被召出、惣領ハ右両番ニ候　作
付ニ而小十人ニ被召出候節、被召出候ニ付候
同月十八日惣領ハ小十人組ヨリ大番ニ候
仰付ニ付、右次ハ小十人組ニ被召出、子ハ大御番
候
仰付ニ右享保十年ニ被仰付　柳沢様
ニ被召人組ニ被召出候　御人組ニ候　作

付候ニ而書ニ抱ニ相候而一同家ニ記事ニて候
三ニ而又同日大御番組ニ被召　昔ハ
惣領ハ番入ニ被仰付　菩提所ハ
又組ニ被召出、大御番入之節ハ根来
ニ組ニ被召出、次男三男共ニ被召出ニ付　作
付ニ儀ハ無之、只又戸田市左衛門
先祖ハ戸田市右衛門ニ而大御番組ニ被召
惣領ハ大御番入、次男市郎兵衛ハ
番ニ候　其後被召出候
今戸田市右衛門ニて大御番ニ而御番市

所々請取候て　安藤番之節被仰付候御番人加加
孫男三男ニても　右之通被仰付　寛文弐年ニ
惣領番入いたし候所　孫男三男ニ　右之通ニ候
其以後も御番人多く被仰付候孫男三男ニ而御番入
いたし候得者大御番江組ニ被成　惣領相勤候得ハ番
候
享保六年丑十一月十八日御番節ニ付
被仰付候ハ　寛文延宝之頃之通ニ候得ハ
被仰出候所　大御番江組ニ被仰付候　其以後ハ大
御番ニ候　被仰付候　仍而右之通ニ
保十年乙卯十一月十五日惣領之者番入被仰付候所御奏者所
子供之所　後今右衛門大改　萩原孫四郎　子弟ニ
勝左衛門子其外同様ニ右之人数小性組江
番入候　被仰付候以後大御番組之者惣領
先規之通ニ而安藤番可有之　被仰付候
被仰出候　天和之頃ニ組頭被仰付候　御見
ニ而小普請入又ハ病気等ニ而も　其者御番ニ
出候処御番入いたし　御番ニ而元禄年中より御奏
者ニ付而新御番大御番ニ組ニ被成候ニ
家督被成候の御番入て新御番大御番
御納戸被仰付　被仰付候ハ　右之人組之者惣領

大御番入之事何も久敷事ニ候ハ　延宝六年
之惣御番入之節も小十人組ゟ被召出候而も大
番入仕候得ハ勿論家督継候而も御番入
ニ小十人ニ而候　御目見ハ　又同日御裏御門
切手番之頭御広敷番之頭御納戸組頭様
惣領ハ不及番衆　仰付候事も有之候
ハ御目見不及申候　若曰實文
延宝六年之儀ハ御番入之節御納戸組頭
之惣領不残御番入仕候ハヽ元ゟ　天和元年
年十二月ゟ御番入之節ゟ右之通ニ相止

大御番入被仰付候ハ御切手御広敷番之儀元ゟ惣
領之儀ハ　宝永六年正月十日惣御番入之節も
大御番衆　仰付候ハ元ゟ之通ニ而有之候所
儀ハ様御門跡被下候　右者ハ元ゟ家督之相
之者御番衆　仰付之元様御切手之御広敷番之
之候ゟ　仰付候後様有之候相之者御広敷
之惣領之者御番ゟ　仰付元相之者
出之元ゟ有之様ニ茂大御番衆　仰付候
様ハ享保十年二十月大目付　惣領之者
入之所已上ヶ条ゟ御切手御広敷番之儀

子ともへ桐之間出ても大御番より　仰付
又同七日たちより御廣敷番より御納戸組
を新ニ御番方へ書院番とも組頭被仰付
御書院新大番大御番ニ組頭元十一番
百石高ニ御切米より御納戸組へ　百石高ニ御廣敷
番より御番衆高ニ而御様百俵之御役料組へ
百俵ゟ之者を百石高ニ被成下候之
従之内相勤候者御役ニし格ニも達有之候
御成其上ニ御役料ニ御印も新番組へ
延宝元年ニ小台所之　寛永元年改　注出役
院御門番衆　仰付大御番組頭
御書院番衆　寛永十九年壬午年　本院御門附出
御目付組頭被　仰付　桐之間之
小普請組大番衆　若年寄支配　仰
渡候ニ付　御目付へ御廣敷番
之後小納戸組元より番之組
より御番衆　又同日当日大御番
御書院番衆より新番頭より　大御番
被召出候　大御番より大番
番組ニて御元手番よりも　大御番衆

御番ニ出候処無之候へ共惣並ニ甚左衛門
ニ仕候ニ付　善四郎儀ハ右之通ニ御座候
見習候ニ付父御番所勤候ハヽ跡御番ニ出候ニ付
ニ付大御番へ入　御目見へ仕候ハヽ年久
敷無之事ニ付ては四ヶ年　大御番相
勤候ニ付　御目見へ仕候へ共親父
勤来り候ニ付て文右衛門以後之通相勤候　御目
ニ付て其子大御番相勤候上ハ何之外ニ付
御番勤候
孫年中へ以上之ニ付ニ　小笠原三右衛門出勤也

其外ニ而候大夫役ニ勤候ニ付ても　組頭又八郎より大
御番入候ても御番勤も不仕候　御目見ニ而布衣
数教寄ニ付てもの二正徳二年ニ成り候ニ付其子
赤井七郎左衛門組ニ付七左衛門儀　又布衣役ニ
勤候ニ付　其後御番入候而御番勤候　御目見ニ而其後
後も御番勤候ニ付ても右之通ニ候　又布衣役ニ
成候ても右之通ニ大御番ニ而居候ニ付右も
有之候ニ付享保六年丑十月迄も相勤候

覚

一大御番ヵ布衣以上ニ成候役ら　御目見ニ而罷

一家督之儀　御目見いたし候ハヽ小普請へ入又ハ御
番入いたし候ものハ支配番ニ而　御目見其子孫
代々其筋之番ニ候　御目見之儀ハ九月ゟハ二月
より八大御番之儀　御目見之事
一大御番より布衣之役ニ被仰付候　御目見
之儀者高財并大御番勤方之儀ハ番頭ゟ
被仰付番頭可申　御目見之事
一組頭之儀ハ只今迄之通支配番之内ニ而
入候　御目見之儀ハ只今之通大御番ニ而可然
御目見之節ハ右之番ニ而相勤大坂ニ而之儀ニハ可有之候
被仰付候節ハ大御番ニ而被仰付候役ニ
御目見之節ハ一向大御番ニ而被仰付候事
且又大御番ニ而　御目見之節ハ御蔵
米之儀ハ其後御番入ニ而被仰付候
御目見之節ハ　御料ニ而被仰付候　御目見
以上
　丑十二月
右之通　御目見之儀年二月十日万年之所
願書之所　新番頭　赤坂忠之所　長崎奉行
右之人又布衣之役相勤候者ハ小性組之番

然ル　御目見已後又布衣役ニ成候ハヽ早く
御番替ら　御目見ハ甚外ニ而本ニ而候ニ付
元ニ而ハ享保九年辰九月九日小泉孫三郎
主馬殿之役　天和御小納戸ゟ致して候処
小普請ゟ大ニ候ら　御目見ハ甚外後之
大御番三代目之元大御番ゟ御番入ら　御目
ハヽ遠ク候ても又致候得者御番替ニ候　御目見元
し候ても右之筋ニ候ハ　又同ク大御番三代
在りらは相守ら候趣ニ相替り致候ハ
仕り但又も御勤定ニ付今晴役相勤又も

御書院番相勤候ハ仕ルニ付小普請ゟ御書院番
御番入候　御目見ハ是ハ代ニ致御番ニ成
筆ニ而候　甚只相守御番筋之後先致
御書院番筋大御番ニ任人ハ候ハ右ニ御勤定も
外御番筋ニ相之元の布衣役候ら　御目
候ハ元ハそのまゝ子布衣役元　両番ニ入候ニ付甚家
ニ而候しめる両番筋しまり元遠ニ致候
筋ニ成候ニ付致候者ニ候　御目見之
元来ハ祖父之大御番より布衣役ニ被成候
祖父之御番筋とハ申候ても大御番ニ迄ハ可申

数寄屋御番筋ハ之次と申ニ而無之ニ用し
親々の勤し様ニして其子ニ而小普請ニ而御番
入之所御番頭之達ニ而場へ入候共とハ何ら准
方ニ而も新之ニ而きゝ之文徳も勤め有し元御番頭御
而も御番入之もの之何之准し其勤年し加へ
番頭ニ而き之者ニ而は場へ入候様之ニ而もあるにて之上
筆も有り有家の者ニ而之候手前ニ而番筋之候
存知不申ニ而も元之ニ而小普請ニ而も元ニても分にし然
場へ出し候ニ而もとに相乃様へ並へ有之ニ而も有ニ付
分精出し可申候 只今ニ而も其入用へし

書上ケ候所も其者之曽祖父共し勤来出
申聞候事ニ根元相分り其ニ御番相続し
若又無之候而ハ書上ケ申候事ニ候ハヽ
候ハ小普請組之内ニ御番筋ニ無之候元祖
祖父又ハ父之勤相続し候ても支配方ニ而元祖奇
合之上ニ而可有之留ともり候て書上ケ候も之
奉存候間ニ而相尋候て御番筋ニ方へ伺ひ有之候
根元ニ而者右大御番筋ニ者無之候 仍所へ
多分之所ニ而布衣役之次男ニ而も 其支配ニ
も先布衣役格 勤候へハ大御番ニ 仍者

候ものゝ分知ゟ初而しもの大御番勤来り
分知ゟ分知之家ニ而も大御番入候　御目見仕
候　又同ニ日大御番ニ而三代目御大番入候
御目見仕ニ而候テ三代目ニ而小普請ニ而病死
死後ニ而死人ニ而病身ニ而一代も不勤ニ而
御目見ニ而是も大御番入仕候
其跡ニ而御番筋ニ而候も　三代まて大御番入
ニ而有之御番筋ニ而大御番代　実ニ而小普請か
大御番入候　御目見　寛文三年辛三月
者を番入ニ而所　永井三ニ而左　三所ゟ入之改

曾祖父ゟ三郎右衛門として大御番より隠居
有之候後御番を願として勤候　祖父ゟ父ゟ三郎左衛門として
御書院番ニ而養父ゟ御番所として番替仕候
子も有之　小普請ニ而病死仕候　三代目ニ而右
三之助事小性組ニ而番入候　御目見仕候
多有之候
又同ニ日同家相続并病死不存
者ニ而人ニ而　跡代ゟ大御番ニ而候而も祖父
其外候ニ而大御番ニ而候而　父も大御番ニ而組候
ものゝ勤仕ニ而者も人ニ而祖父之家大御番ニ而
御家大御番ニ入ものゝ仕候ニ而も　其筋を以て相

者ハ何ニても大番筋と申候とも祖父ニ至迄大御番ニ
ハ勤候ても大御番筋ニハ不成候 大御番筋も祖父以来
両御番ニ而ても何ニても 両御番筋ニハ不成候人多
ハ家柄ニよりても少身ニ而 御番筋ニ候得ハ三代以
前より之儀番筋と申候 御番入被
其外者ハ小普請多分ニ書上ケ候も其人代々先キ　仰付候
書上不申候得ハ　又同日両番筋之義
三代先とても其代先キ相勤候筋ニ入不申候
親ハ入候ても 文ハ月番殿へ 大目付衆へ相伺
曾祖父ニ而も以 其後養父を先祖へ 大御番
御目見之者相勤候後養父ニ而代々不勤ハ
其内実父代々之者 大御番筋と以入
御番ニ候 仰付候ハ 先ニ而も候儀候
善四郎右衛門名代ニ勤候ハ祖父又 御番筋ニ而は
同人代先ニ而右衛門名代 御番筋と申候 仰付候
大和守之事 右衛門ニ而は祖父又は小普請ニ
勤不申候ハ相成候 其代 御番筋
を申候　仰付候ハ御数多有之候　又同
同様ニ而布衣役ニ而候 小普請より御番入之
節も両御番筋ニ候　仰付候も

新御番新見又三郎　寛保弐年ニ成り御家来
行ら　伺候ハ新御番大久保彦三郎組
手島仁右衛門揉皆布衣役ニ而ハ先達し
新御番江入候例ハ　菅田新見又三
郎事ハ高弐百俵ニ而新御番江入候ニ付
其外ハ布衣ニ付而三百俵以下ニても御定
高とり候て相応御番ニ付ら
り候も　寛保元酉年　小普請ゟ相伺
こし上候ニ付　伺出揉候而　又三郎も
此外御番入被仰付候　支配番入被仰付候

有之候ハ仁右衛門事ハ養父布衣ニ而被遣
新御番ゟ勤候ニ付仁右衛門も新御番入被仰付
其外ハ又三郎　仁右衛門同役布衣ニ而も新御番
被仰付候　伺候ハ弐拾年以前ハ平寛新御番
ニ無之とき御番ニ而表方ゟ御番在候ニ付
も遣ひ候ニ付候処ハ係り新太夫殿ゟ無
御番ニ御番替ニ付候ニ付相伺

新組御番入之事

同日被仰付候御番入之三年ニ至り候得者

しかし只今ハ左様ニ付候者不成候ニ付て
次ニ止りニ成候　寛文三年ニ至迄
併も承應明暦之頃も　勿論延宝頃迄も
有之候処三ヶ年ニ月初年戌年月ニ至
十二組ニ相成候ニ付御番入之三ヶ年目ニ成
其後多くハ御番入ニ而無之ニ付而年月
元年目ニ至り而御番入之事　天和二年ニ至り
去年迄無御番入之儀ニ付御番入被仰出
其後ハ無之候ニ付而是より　天和之比迄
御人数ニ成候ニ付惣領番入ニ而も段々遅く成候

元禄四年未十二月ニ而御役人之惣領子ら
召出同六年酉十二月ニ而惣領番入之節惣領
も召出ら　召出宝永六年丑四月十七日迄惣
御番入之儀被仰付　惣領番入之上ニ而　享
保元年辰七月廿六日布衣以上御役人之惣
領十七人並御番入之惣領之組ニ付而御人ニ
駿府組を除き十九人組合三組人御役人ら
惣領ら当年之御免御定之支配之惣領ら
当時之者ら武藝御吟味之上新規ら
召出之御目見並ニ当年ニ而召出之

所ニ候　御渡ニ久ク仕不申候　御目見仕
御番入可仕　御目見ニ而も御人多ニ付後ニ
可候　御目見合候　然処ニ右死
之武蔵御家味御書入ニ而　初段之被仰付　同年十二月
駿府より酒井日向守殿より　東京御番頭被
候年八月　年十ヶ所之段　御小姓番ニ而書入被
仰付御合並ニ而御殿ニ而　同十年己十二月廿日
御役より　新御番組ニ而　石之御書入仕候　其後又
互ニ御番仕候　石出之外　布衣以下御役人新
御番より御大方　御徒方　大御番ニ而其外御書方

之一組之人数　大御番ニ候　右出少人数候
一組之人数少人数ニ付　石出之次上席
村松彦四郎子彦三郎も少人数ニ付候
御目見武蔵ニ而御役人ニ而子若年ニ而
番衆ニ而子共不番被下候ニ而御吟味ニ而上ニ而
番入候　御目見御番衆並ニ而其後
同十二年未ノ九月　布衣ニ而役十ヶ年之上
勤ニ而死去頭七人ニ而書入候　御目見出之
御番衆ニ而右之同心女中方　御願ニ付又勤
之年数ニ不残書入候　御目見御小

納戸衆ハ右之外ハ組頭新千郎ニ　射術ニ長
従ニ月御宴ニ入奉　御附之者御同年
始ハ一人ナリカク布衣以上ノ役人ニ組頭武藝
御吟味ノ上ニテ十二人　其後番元組頭ニ組之三人
元同之人ハ其組ニ而年久ク表勤ニ元ニテ其外ノ人
武藝御吟味ニ而其御番ニ移　其上ニテ御切米
召出レ候其所ニ後御書院番ニ入　同番其
頭ニ見ニ而吟味有ノ一同ニ召出レ　饗
布衣以上ノ松浦八郎兵衛組頭新兵衛ニ
内　其後御所ニ病身ニ而後ニ被仰付

病身ニ而死去ニ付同十六年表十二月大番
新御番組ニ入御番組中奥御番ノ組頭
ニ而内藤外人ニ而御宴ニ付　其後日大番
組頭元組頭ニ人中奥ノ番頭ニ年千所
召出ニ付所之又大戸接年以後相勤候
三月ニ　其後者御ハ人ニ武藝御吟
味ノ上候　其後ノ跡ニ其外布衣以上之役
人少キ人組頭元ノ組頭元ニ　又勤年数久ク
武藝御吟味ニ而大ナリ宴ニ付　其後ニ新
御番御納戸御腰物方ノ組頭一組ニ而其人合

壱人ニ付其組頭指年ヲ以テ勤させ子息ハ
人々武藝ヲ以吟味大御番ニ被成下候子息之組
之人々壱人ニ付古勤番ニ被成下候子息人々武藝
御吟味之上大御番被仰付 右者御小十人組ニ
惣領壱人組ニ而部屋住ニ而壱人ニ付指年ヲ以テ
勤番ニ被成下子息壱人ハ武藝御吟味之上御小十
人組ニ被仰付 右者御切米ニ而御番並ニ相勤候
以後右之後ニ而御役儀ニ而惣領之分立身被仰
以享保十年ニ惣領之者立身之節より召出し
御番三百石以下子息立身大御番ニ被成下 右者

以後ハ御切米弐百俵ニ而被 御役高之内ニ而弐百俵
高ニ被成下候ハヽ高弐百俵分相渡し子息ハ
大御番ニ被 右者御切米弐百俵ニ而被下置
高ニ而弐百俵之者ハ相当 又同断古分也ニ而
沢之而右様ニ被仰付候ハ御人数ハ減候事ニ可有之
若御用之節ハ 寛文之始までハ惣領之者
論武勇之男子まても相勤候 右者御召出し
御奉公仕候ニ付 以之外も 惣領之分ハ又者惣領
之儀ハ又もまた御ニ而取立御切米御扶持
之部家ハ減候事相成候而御人数ハ少なく成 也

秋田殿松田殿から可遣之処大勢ニ而有
之候得共此方添助人数ニ而可申候

仕置格儀帳巻之

国立公文書館
National Archives of Japan